

# 一九六八年

## 私自身による私自身

天 沢 退 二 郎

1 ずいぶん躊躇したすえに書き出すのであるが、一九六八年という年は、私自身にとってやはり特別な年であった。社会的・時代的にこの私が大した役割を果たしたわけでも何でもありません。しかしあの「一九六八」がなかったとしたら、いま私がやっていることの殆どすべては、このようではなかったであろうし、もしもう一度あの「一九六八」をやり直すことがあったとしても、あのようには、すべてをなさなかったらどうだろうかである。

2 私自身にとつての一九六八年は、山であり同時に谷であった。山では、意識は昂揚しながら心臓は切迫してあえぎ、息たえだえであり、無意識には次々にためらうことなく決断を続けて、身体的には休む時もない。谷では、空気が頭上に重く、

足の下はがらんどろつた。

3 一年数ヶ月をすごしたパリから一九六六年初頭に帰ってきて、次に行くのは七〇年。しかししみじみもへミングウェイが言ったように、パリは「持つてあるける移動祝祭日」だったから、六八年にも私は「パリ」という祭日を持ちあるいていて、「六八年五月のパリ」に、私の持ち歩いてる「パリ」もただちに感応して琴線を鳴らした。

4 一九六八年に私は長篇評論『宮沢賢治の彼方へ』、評論集『紙の鏡』を出し、バタイユ『青空』の翻訳を刊行したけれども、詩集は出さなかった。六六年に『時間錯誤』、次は七年の『血と野菜』。つまり、刊行という行為からみるかぎり、

一九六八年の私は、散文においては山であり、詩においては谷であつたことになる。

5 この機会に、手帳の山を掘りおこしてみた。ずいぶん長い間、主として白水社の手帳を使って、メモ的な日記をつけて現在にいたつていているが、パリ留学時の手帳は「予定」事項のみである。ところが何と、一九六八年の手帳は再び「予定」のみであつて、日録はいっさい記述されておらず、日録の復活は六九年からである。つまり六八年は、行動において山であり、記録において谷であつた。

6 ただし、右の「谷」は、「私」個人のレベルであつて、「私たち」の日々は、同人誌凶区毎号巻末の「凶区日録」に可能なかぎり網羅的に略述された。いまこれを読み直すと、これだけでは内実が乏しく、クソ面白くもないかもしれないが、当時は作成も楽しく読者にも好評だつた。(注)

(「一九六八年五月」の部分で、本稿末尾に抄出してご参考に供する。)

7 さつき、詩においては谷であつたと一応言つたけれども、それは詩集刊行のレベルでのことで、詩を書き、雑誌等に発表するという活動の点で特にどん底であつたわけではない。折しも私たちのグループ「凶区」は、一九六四年四月から出しはじ

めた同名の同人誌を、この一九六八年には第19<sup>12</sup>、20、21、22号を着々と発行し、私も毎号、評論や書評・映画評・舞踏評などの他に詩篇も発表していた。そのすべてを七年刊の『血と野菜』に収めたわけではないけれども、それは特に駄作が多かつたからというレベルの問題ではない。ここに、詩集不収録のまま終つていて一篇を引いて、その内実を検討しつつ、私自身にとつての「一九六八年」の意味するところを再考してみたい。はからず去(？)これが、本稿のかなめとなるはずである。

#### Une Escalé

記録によればその町と次の町との間に私たちの里程標があつた。それはひとすじの細い深い溝であつてその溝糸はそのままひとつの宇宙であり、私たちの寄港すべき時刻史上の一刻だつた。私たちはそのへりのコンクリートに膝をついて長いこと索溝に眺め入つた。糸を垂らしてみる者もいた。私にはそれはむしろ長大な一箇の果実のように思われた。長くのびた果芯(かまど)を子どもたちの骨がゆききし、その両側では無数の太陽どもが乱交にふけり、その全体を下方から色とりどりの星藻がなぶりつつける。私は糸のかわりに自分の胃袋をそつとそこへ垂らしてみた。《関税七万カール、それとも保税にしますか?》冗談(じや)ない。私はあわてて胃袋を引き上げたがすでに遅く、まっ赤な顔をした女兒が外壁にへばり

ついている。私たちは七万カールを割り、かんで払い、その時刻にさらに眺め入ったがそれ以上の収穫はなかった。太陽どもは次々に蝕に入り索条溝は唾液の尾を引く虫様矮星にみだされて行った。私たちは溝にまたがり美しい糞尿を発射していつさいを埋めつくしたが、私たちのなかにもついにそのまま立てなくなつた者がいる。まっ赤な顔の児はそいつに預けて育てさせるとしよう、私たち変身しおえたら取りにくるからよ。

(凶区22号、68年10月、35頁)

これを詩集にも、後の自選詩抄の類にも採らなかつたせいもあつて、この詩の存在自体を私はほぼ完全に忘却していたし、読み返すのもほとんど三十余年ぶりである。

しかしそれをこうして書き写していると、まず基本的に、これが私にとつての「一九六八年詩篇」の一つであることが、ただちに、直接的に、感じとれる。

念のため大急ぎで言っておくが、この詩の「私」が当時の時点での私自身であつたとか、「私たち」が「凶区」同人たちのことであるとか、そんなことではない。そういう短絡は願ひ下げである。

そのことを確認した上で言うのであるが、かつまた、これは誤解を呼び戻すことになるかもしれないが、この詩の「私たち」が、一九六八年時点での私自身(たち)の、一種のメタフォル

であるという側面を、私は否定しない。ここで「私たち」が、そのへりに膝をついて長いあいだのぞきこみ、「胃袋」を吊り下ろし、またがり、「糞尿」を放射する、この「索条溝」は、私(たち)が遭遇した、というより私(たち)のありようでもあつた谷というものの、その見えざる奈落と、関係があることはたしかであり、だからこそ私はこの詩を一九六八年おそらく夏に書き、その年の秋に「凶区」誌上に陳列したのであるし、さらに言えば、この索条溝を「そのままひとつの宇宙」とみなし、そこに「太陽ども」や「虫様矮星」どもを幻視するという、意図的な誇大妄想ぶりは、一九六八年時点の私(たち)が所謂《情況》に対して抱いていた意図的な誇大妄想と明らかに照応している。

そして、今だから言えることだが(あるいはむしろ今だからこそ言えることだが)この「誇大妄想」こそは、「一九六八年」なるものの大いなる真実であり、価値であり、必然性の証明でもあつた。

「今だからこそ」と言つたのは、もちろん「当時」との対比においてである。一九七〇年刊の『血と野菜』の印刷用原稿を私自身がまとめたのはじつは一九六九年夏以前である(刊行が大幅に遅れたのは、詳しい事情は省くが、要するに七〇年万博のせいだ)が、その時点でこの「Une Escalier」は排除され、凶区21号発表の「男の勝負」が入っている。今の私なら、この選択は逆にしたであらう。

8 「凶区」23号(69年2月)は私が編集担当で、「編集後記」は私の署名になっているが、その最後にこんなことを書いています。

《大学闘争について一言したい。私自身すでに勤務先の大学において渦にとりまかれているが、いわゆる「暴力」から言語へのかなめにラディカルな垂直視界をひらき、とざされぬこと。》

このような「暴力」「言語」「垂直」というのが、一九六八年における私のいわば三点セットであった。

今また、「暴力」は、アクチュアルな問題としてクローズアップされている。雑誌「大航海」の最新号の特集など、興味をもってバラバラとめくってみたりしている。

(二〇〇〇・二一・九)

《参考》 凶区日録(第21号・68年7月刊)から

5月

2日 沖縄嘉手納基地で沖縄原水協・ベ平連が武装米兵と衝突。

3日 ベトナム会談開催地に北ベはパリを提案し、米受諾して10日開催決定。渡辺 代貸 を見る。藤田、高野は新宿でデー

ト。

4日 新宿花園神社の状況劇場 由比正雪 へ鈴木夫妻、高野、

彦坂、そして、徳川女系図 前科者 を見てから来た渡辺。

終幕の雪降らないまま終って、アサヒ・ビヤ・センター。この日、テト以来のベトコン大攻勢。育英会、エンブラ事件の学生

15人に奨学金停止。

5日 ベトコン、テト攻勢につぐ規模の一斉攻撃12ヶ所に。ロ

アン南ベ国家警察長官、重傷。

8日 サイゴン市街戦激化。佐世保で異常放射能発表は9日)

9日 渡辺夫妻、厚生年金小ホールでの天井桟敷公演 伯爵小

鷹狩掬子の七つの大罪 他を見る、八木忠栄と偶会。

10日 パリ会談の予備折衝はじまる。パリの学生デモ、《五・

一〇事件》。夜紀伊国屋ホールで鈴木志郎康H氏賞式。ピンク

のYシャツで鈴木ブアブア詩朗読。凶区出席。終りを待たず天

沢は小島屋へぬけ出し、高野もはせつけて20号校正。残った鈴

木夫妻、藤田、彦坂、渡辺はアサヒグラフ大崎記者岡松カメラ

マンと同じフロアのニュートキーヨーで生ビールと食事してか

ら小島屋へ行き、天高組ややふんがい。カサドルへ流れて撮

影。

11日 仏労働総同盟も学生デモを支持13日のゼネスト指令、ポ

ンでも3万人の学生デモ。ソードフィッシュ佐世保出港。渡辺

青森出張。

13日 渡辺、入沢康夫氏と共に早稲田詩人会の小会合で講演中、

客席に彦坂が現われたのでギョツとする。終ってから喫茶店工

ピアンで早稲田のオトナシイ学生たちを相手にやや困惑した渡辺、彦坂と高田馬場で生ビール。フランスのゼネスト始る。

15日 ベトコンロケットによる一斉攻撃。

16日 東北・北海道に《一九六八十勝沖地震》。鈴木、青森県六ヶ所村でこの地震に遇い、農家から男の子を抱いてあわてて逃げ、その抱いている当の男の子がいないと大あわて。なにしろ地面がサブンスブンと波打つんだからあんなの生れて始めて。フランスの国営産業の工場を労働者が占拠。

17日 フランスのスト拡大。

18日 早大総長選挙を学生が実力阻止。カンヌ映画祭でゴダール・トリュフォーが先頭に立って学生労働者のストに団結をよびかけ映写妨害。レネ、ルルーシュ、レスターらは出品作撤回。映画祭は中止に至る(19日)。マドリードでも学生反フランコデモ。

19日 ベトコンがサイゴン砲撃。

20日 フランススト拡大。通信もマヒ。渡辺夫妻、歌舞伎座で歌右衛門の千代萩。他を見る。花道へどうとどうと出てくる延若の仁木弾正にまたしても感心。

21日 サルトルら文芸協会本部を占拠。

22日 鈴木生れ育った亀戸の卒業した小学校の目の上の高層六階へ引越。

高野天沢渡辺夫妻藤田は小島屋で軽井沢行の打合せ。高野鈴木宅へ。

23日 フランス国民議会、不信任案を否決。

24日 パリで市街戦、全土で農民デモ。千葉タイプへ行き、凶区20号を運んでもらった彦坂、ルオーで天沢と会う。

25日 朝七時四〇分上野発はくたかで凶区第一陣の天沢高野鈴木夫妻渡辺夫妻は軽井沢へ。第二陣並河さん第三陣藤田夫妻続々到着。ソフトボール、ピンポン。ピンポン勝抜き戦で天沢優勝。庭先バーベキューとビール。夜は暖炉の火を見ながら凶区ダイス。

26日 霧の軽井沢。寒いので一日中暖炉に火を燃し続ける。車庫内の特設ピンポン台はニギヤカ。夜に入って、凶区銀行券によるボーカー盛んとなる。

27日 朝天沢帰京、ひる過ぎ上野着、伯父の告別式に出たあと、夜学の講義にまにあわせる。四時二十六分の急行軽井沢で高野藤田夫妻渡辺夫妻並河さん帰京。渡辺夫妻を除く上記の4人東京駅アートコーヒーで鈴木がここに来て云々と噂していると、当の鈴木が現われ、原稿書く鈴木を残して去る。

28日 ルナミ画廊合田佐知子展で渡辺夫妻、千恵子さんと天沢会い、この前に高野来り去る。渡辺は彩色タマゴ一個買う。渡辺夫妻と天沢はレンガ亭で夕食し凶区20号発送。ウッドでお茶をのんで帰る。彦坂某パーティで飲み過ぎ帰途、記憶喪失中に負傷、全治一週間。

《注》「凶区日録」については、後に吉本隆明氏が次のように

コメントしている。

『初期の「凶区」で詩としておもしろかったのは鈴木志郎康さんのプアプア詩。(中略)だけど、ほんとうにおもしろかったのは、日録“なんです。あの人たちが喫茶店から喫茶店を点で日常的に繋ぎながら都市の中を回遊している。それはとても印象深かった。(中略)あれは戦後社会の、新時代の低等遊民の発生を象徴しているんですね。いまはそれがもっと拡散してるし、もっとおもしろいかも、すさまじいかもしれないですね。先駆的な感受性がある中にもありますよね。』(正津勉のインタビューに答えて。『東京詩集』作品社、一九八六所収)